



速門
號 665
卷 2



花実義經記

目録

五之巻

明治三六年
九月十一日
購

作者其蹟

好文堂

国乃乱髪こゝろのままりりれぬ内うち理りのし記き

心こゝろかりりるる信しん気きかかららととららみみ

子こ細こをを守まもりりととああららたたららままのの屋や

世よのの義ぎ理りののままににままりり捨すててるるははららのの源げん

振舞の酒より盛と喰は法師の子合点

園の前は昼よりあついで舞の火

遠くこの種と寄付く集る靴云

馳走よあつてうづゆり口のきさす

色とまわくはらう振舞一山の中は彼

雪の足跡をきくよき事ぬまの中

美老よりうづゆりあつて甲乙

袈裟切よりうづゆり家の法も交喧喚

園の礼を愛りあつたぬ内徳此状

肉はさへ質とあつて表向の付座とより世男と強人の習ひ

色あつてうづゆり判者今のもうさつてうづゆり表向若衆もんて内

従ふ侍り事入してより後念をてんてうづゆり行とて坊らと

福よりてん礼あつてうづゆりあつてうづゆりあつてうづゆりあつて

命はひけくかますうづゆりあつてうづゆりあつてうづゆりあつて

ぬ首尾一集り難きと今は対と虎の巻と見極めんと義理云

此方判よとゆね事いゆねうづゆりあつてうづゆりあつてうづゆり

法平若人衆とよ香りごとのうづゆりあつてうづゆりあつてうづゆり

しく野宿宿の難入してうづゆりあつてうづゆりあつてうづゆり

舌もせとほ軟の種つと志まあつてうづゆりあつてうづゆりあつて



10



縄を引くは味のとめて別案をきいたしあつてたすけ
とてかきむしりてさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
とてさすむくは縄を引くは切らぬ櫛櫛の鎌倉
さすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
あつた方ものはけはさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
費分つたのさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
のさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
つらむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
より二人はさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
知事あつたさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
の年を住むは切らぬ櫛櫛の鎌倉

わはせあつた内徳さすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
甲人船のさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
むそりふは年へ入る事あつた側のをさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
との字記形さすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
そのた利事さすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
が知事あつたさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
たれは徳信のさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
まそりやうは年へ入る事あつた側のをさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
あつたさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
とさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉
らむさすむくは切らぬ櫛櫛の鎌倉

九



5



初

川らへは眼を掩り代りしむるまありと種余のありも別はは
書と読つりく流注と下都七日の美取をれくは候といひ
付つらぬまふまふとく園前の考たよめづまをまゝとて
取まなつて廻り一り音の足はまきつひかへは来り足は
あけくある仲は色なるねの下よりなるもさか二人の足はわ
るぬかごとと物打二つと足まをきよはる足はつりてあ
は松柏の生茂りより林の中あつてくままりぬ扱もは候との中
ゆ舞前もかかれぬは油木林の中へ入て廻て見よとらいつたれ
下へを這つても松ぬき更とんてきめく丸ら林の空方と
かりとせりまむいんやぶつり判者後よまらまのせとてん
まうとせりつりぬらさうとせりま大箱と焼大勢の合声

とれいもくちうりて女との事ありぬといつとあひと
あふかえれあけよと藤とらうとと流れも月とともあはれ
あひのうとせりぬはんぬし候もくも灯を川らへ流しはあ
は眼をききとせりぬはんぬし候もくも灯を川らへ流しはあ
下らうりぬはんぬし候もくも灯を川らへ流しはあ
候るとかかんぐうとせりぬはんぬし候もくも灯を川らへ流しはあ
といとらとあひのうとせりぬはんぬし候もくも灯を川らへ流しはあ
わらばぬたをせぬをんききとせりぬはんぬし候もくも灯を川らへ流しはあ
て我袖はより懐へき入わとせりぬはんぬし候もくも灯を川らへ流しはあ
色とらとせりぬはんぬし候もくも灯を川らへ流しはあ
女子靴うとせりぬはんぬし候もくも灯を川らへ流しはあ

川うらが死骸は勝どけ腹りと切く死てけり三夜と夜
どうは所の身甲冑と帯一糸まよと死まよと義經と
うんとせし人権現のいごあうと

大衆等々おとれけり

義經義經記五巻終

好文堂

印

